HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一部　通史.　第一編　札幌農学校から北海道大学へ（一八七二～一九六八年）
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1-4
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28129
Type	bulletin (article)
File Information	1_1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第一部　通史

第一編　札幌農学校から北海道大学へ

（一八七二～一九六八年）

お雇い外国人招聘と海外留学生派遣による欧米の科学技術導入に始まる開拓使の教育政策の試行は、北海道「開拓」の指導者を養成する札幌農学校の開設という形で実を結び、教頭に招いたW・S・クラークをはじめとする外国人教師と、才能豊かな生徒たちを得た農学校は独自の校風を形成していった。その後、第一期生佐藤昌介が長く校長・学長・総長を務め、文部省直轄学校への改組、東北帝国大学農科大学としての帝国大学昇格、北海道帝国大学としての独立と、学校の経営基盤の安定化と組織の拡張を図っていった。学術においては農学を中心に高度な研究が進められ、北海道帝国大学成立後は九つの帝国大学の一つとして、農・医・工・理学の諸分野で近代日本の学術研究の中核を担っていった。また戦時期には科学研究に関わる三つの附置研究所が設置された。そして、開校以来敗戦に至るまで、北海道にとどまらず、樺太、台湾、朝鮮、満州、南洋諸島といった植民地などの経営とも深い関わりを持っていた。

敗戦後は、民主化の動きと連動して北海道帝国大学でも戦後改革の検討と模索が活発に行われた。またこの間に、長く懸案であった文系学部が創設され、総合大学としての体制が整った。一九四九年には新制北海道大学への改組が行われ、以降、国立総合大学として戦後日本の高等教育の基幹の役割を果たすこととなった。さらにその後、新たな学部の創設、さまざまなセンターや学部附属施設などの新設が行われ、大学組織の拡張が急速に進んだ。一方で学生運動や学寮問題、教養部をめぐる議論など、大学の管理・運営や教育・研究体制に関わる問題も噴出し、このあとの大学紛争や大学改革の動きへと繋がっていく。

第一編は、札幌農学校設置に繋がる開拓使の教育政策から、戦後に北海道大学となり基幹大学として組織拡張が進んだ一九六八年、大学紛争前夜までについて、『北大百年史』通説（一九八二年）の「通史」の記述を約四分の一に圧縮し、適宜加筆を行った。